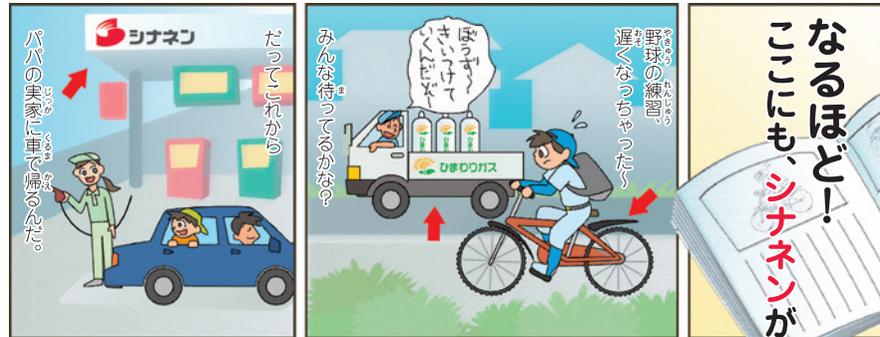


いつもありがとう

第2回作文コンクール入賞作品集 2008

選者 あさのあつこ / 尼子騒兵衛 / 森田正光 / 鈴木弘行 / 麻島陽一



こんなに、身近にあったんだ。ボクの街の『快適生活プロバイダー』



石油



LPガス



ハイカロ炭



リフォーム



自転車



洗濯機防水パン



無機抗菌剤
(消臭スプレーに使用)



新エネルギー



水廻り事業

いつもありがとう 第二回作文コンクール入賞作品集(2008) もくじ

最優秀賞

「お星さまになったママ」

水野 美夢

4

シナネン賞

「私のお父さん」

北村 七海

6

朝日小学生新聞賞

「いつか、聞いて」

堀江 浩司

8

優秀賞

〈低学年の部3編〉

「じいじ、いつもありがとう」

高桑 花奈

10

「ありがとうとんとん」

野口 祐生

11

「永遠のライバル」

尾藤 和歌

12

〈高学年の部3編〉

「いつも、ありがとう」

磯田 和也

13

「最後の『ありがとう』」

竹俣 紅

14

「じいちゃんのような男になるぞ」

森 龍人

15

入選

〈低学年の部7編〉

「だいすきなおにいちゃん」

小泉 晟利奈

16

「おとうさんありがとう」

上國 料伸一

17

「ありがとうお母さん」

塩見 璃子

18

「がんばるおとうさん」

今井 駿

19

「ぼくの姉」

中村 涼雅

20

「大好きネーネ」

長田 華穂

21

「お母さんのハンドパワー」

大濱 倫花

22

〈高学年の部7編〉

「ぼくの応援団長、大ちゃん」

齋藤 黎明

23

「大切な由美ちゃんへ」

正木 太樹

24

「オタンコンナースありがとう」

前田 颯斗

25

「うるつさ〜い!!」

山口 恵璃

26

「『ありがとう』の代わりに」

山田 このみ

27

「パパ、いつもありがとう」

中村 朱里

28

「びつくりをありがとう」

黒木 郁臣

29

佳作

〈低学年の部10編〉

「だいすきなもうとへ」

高柳 祐花

30

「ぼくのひいじいちゃん」

大野 壮史

31

「おとうさんだいすき」

迫口 優

32

「ぼくのおにいちゃん」

眞鍋 利基

33

「大すきなおじいちゃん」

土田 竜也

34

「おとうさんいつもありがとう」

君和田 岬

35

「わたしのまま」

遠藤 彩香

36

「ありがとうね、なるちゃん」

井上 大誠

37

「生きていてくれてありがとう」

清水 克仁

38

「七夕が三回の家族」

太原 杏歌

39

〈高学年の部10編〉

「そんなに忙しかったんだね」

門田 有紀乃

40

「ありがとう、生まれてくれて」

山口 庸可

41

「ありがとうより、もつとありがとう」

天埜 優奈

42

「ばあちゃんいつもありがとう」

本間 貴大

43

「大好きなお母さん」

首藤 央樹

44

「おばあちゃんいつもありがとう」

北川 真衣

45

選者あとがき 50

あさのあつこ (作家)

尼子驥兵衛 (漫画家)

森田正光 (気象予報士)

鈴木弘行 (シナネン株式会社代表取締役社長)

麻島陽一 (朝日小学生新聞)

主催…朝日小学生新聞

共催…シナネングループ

後援…文部科学省 朝日新聞社

●応募総数二九、九四二作品の中から選ばれました。

「お星さまになったママ」

福岡県 飯塚市立平恒小学校 二年

水野 美夢

私のママは年長のときになくなりました。ママは白くて長いはこの中にねむっていました。とてもきれいで、お花ばたけでねているみたいでした。私はママがかえってくると思っていました。でもママはかえってきませんでした。私はやっとママがお星さまになったのがわかりました。私はいつもママのおふとんの中でだかれてねるのが大すきでした。そしてママはいつもやさしかったです。

そんなママが、いつも私やいもうとにおしえたことがあります。それはおとしよりやこまっている人がいたらたすけてあげることです。ママは体のふじゆうな人をおふろに入れてあげるおしごとをしていました。私は「どおしごとのようなすをビデオで見せてもらいました。とてもたいへんな

おしごとだと思いました。

でもママはいつもよろこんでいました。なぜなら、おふろに入れてあげた人からおれいをいわれていたからです。「ありがとう。」「おふろきもちよかったよ。」と言われてうれしいきぶんになったそうです。

私は毎日、よる星空を見ます。そしてママにおはなしをします。学校の楽しいおはなしや、妹のことをおしえてあげます。

私には夢があります。それはママといっしょのおしごとをすることです。体のふじゆうな人やこまっている人を、いっぱいたすけてあげたいです。お星さまになったママ、私をうんでくれてありがとうね。そして、いつも私のそばにいてね。

私のお父さん

滋賀県彦根市立金城小学校六年 北村 七海

私は、お父さんが最近あまり好きではありませんでした。お父さんは、鉄筋工の仕事をしています。建物を建てる時のきその仕事です。外仕事なので、とても真っ黒です。でも、疲れているのはわかるのですが、いつも家ではパンツ一丁で、私にあれして、これしてと言つてばかりです。私は、「お父さんは家のこと何もしていないのに、文句ばかり言わんといて！」

いつも思っていました。でもこの間、夏休みなので妹とお父さんの仕事についていきました。お父さんは、家とは別人でした。ゴロゴロ寝てばかりのお父さんしか知らなかったのですが、重い鉄をはこんだり、とてもテキパキ動いていました。かっこよかったです。その時、発見したことがありました。お父さんの右の肩が下がっていたのです。お父さんに聞いたら、「もう何十年も鉄筋を右肩でかついでるから、右だけ下がってしまったんよ。」と言っていました。

私は、そりゃ疲れるなあと思いました。きれいなスーツを着て会社に行っているお父さんがかっこいいと思っていたけれど、汗をいっぱいかいて、真っ黒になって頑張っているうちのお父さんもかっこいいなあと初めて思いました。

世の中には、色んな仕事があります。でもその一つ一つが、誰かのためになったり社会のためになるのだと思います。お父さんのようにしんどい仕事も誰かがしないと成り立たないと思います。

お父さん、いつも汗臭い！とかきたないとか言つてごめんさい。お父さんは、私達家族のために一生けん命仕事をしていてくれるのに……。

お父さんいつもありがとう！。お父さんの右の肩が下がっているのは、私達家族を支えてきてくれた証なんだと思います。

これからも決して忘れてはいけなないと思いました。でも体には気をつけて、ケガをしないようにして下さい。

私は、そんなお父さんをほこりに思います。

「後ろからくるまー。」

と、前を走るぼく達に声をかける兄。そうかと思えば、

「ここに段差があるからねー。」

と、母が振り返って声を張り上げる。みんなの額には汗が流れ、背中には大きな世界地図が出来ている。それでも、足に力を入れてギョギョッとこぐ度に感じる心地好い風は、何ともそう快だ。近頃、我が家では、『エコドライブ』と称して、よく自転車で出かける。こんなふうには、家族みんなと自転車で乗って出かける日があるなんて、数年前のぼくには考えられなかった。

ぼくは、超未熟児で生まれたため、呼吸器のお世話になって生活する日が続いた。けれども、そのままでは病院生活しか送れないため、家族と一緒に過ごせるようにと、気管切開の手術を受ける事になった。そして、退院。でも、それから母は、ぼくに付きっきりの毎日。気管切開をしているため、常に吸引（医療行為）が必要で、買い物や兄の幼稚園の送り迎えですら大変だったと聞いている。入院も、何度も繰り返した。その時も、母は必ずぼくの側で子ども用の小さなベッドに身体を丸めて一緒に寝てくれた。障がい者センターや幼稚園、小学校へ通う時も、いつも母とぼくの命を守る吸引器がセットとなって、行動する日々だった。

それが、今年の夏、ぼくの喉に入れているチューブを抜くための移植手術の話が持ち上がった。それまで何度も手術は受けてきたけれど、この手術には父も母も慎重で、母は何度も何度も担当の先生と話し合っていた。ぼくは、声が出せるようになるんだったら、という思いで、

「いいよ。」

と、簡単に言っただけだけれど、両親にとっては覚悟を決めての決断だった、という事を手術後に聞いた。

それから一年、ぼくがマラソンランナーならば、母が伴走者である事には変わりはない。ぼくの通院や訓練に付き添い、いつもぼくを見守ってくれている。ただ、以前はいつも母の肩に重く下げられていた吸引器がなくなり少しは楽になっただろうか。

ぼくは今、言葉を声に出して言えるようになるための言語訓練中だ。みんなは、平気で鼻や口で息を吸っては吐き、声を出してしゃべる。どうしたらそんな風に自然に発声出来るのか、ぼくには不思議だ。ぼくも、みんなと同じように鼻と口で呼吸したい。けれども、自分の身体なのにぼくの意思を無視して、チューブを入れていた穴から空気が出入りしてしまう。だから、まだ言葉が声にならない。だけど、待っていて、お母さん。いつか、きっと、

「いつも、ありがとう。」

って言葉を、聞かせるからね。

じいじ、いつもありがとう

茨城県
石岡市立園部小学校一年

たかくわかな

「かなが、ひかれつちまったらたいへんだ。」と、いつもいいながら、あめのひもかぜのひもはれのひも、おくりむかえをしてくれるじいじ。わたしが、しょうがこうへ、はいるまえから、「いいか、かな。どうろわたるときは、てをあげて、みぎみてひだりみて、またみぎみてわたるんだぞ。」

と、みぎがいたくなるぐらいはなしてくれませう。それは、とうこうはんのおともだちといっしょにいっしょに、わたしが、しんごうのないどうろを、わたらなければならぬからです。じいじといると、あさおともだちがくるまで、くさばなやむしやとりをみつめて、なまえをおしえてくれます。なんでも、ものしりじいじです。

「かなしつてるか。カナカナカナと、なくセミがいるんだぞ。」

「えつ、ほんとー。かなとおなじなまえだね。」

「いいや、カナといつても、ヒグラシというなまえなんだよ。」

「こんどつかまえてみせてね。」
と、あさがつこうへいくあいだのおしゃべりが、とつてもたのしんです。

なつやすみにはいつて、じいじが、

「かないたぞ。カナカナセミ。」

と、わたしをよびました。セミは、みんなおなじとおもっていたけど、ちかくでみると、めやはねのようもいろいろあるところなきがつかまりました。

「カナ、カナ、カナ、カナ。」
なんだか、しんせきのおばあちゃんによばれているようで、ふしぎなきもちになりました。

「かな、セミのいのちは、なつだけのみじかいのちなんだよ。かなもパパやママがいるように、セミもかぞくがまつてるから、にがしてやろうな。」

とじいじがいったことをおもいだして、つかまえたセミをかんなさつてからにがしました。

「カナセミ、バイバイ。おうちに戻すすぐかえるんだよ。」
とわたしは、おおきなこえでいいました。そして、あれつともいきました。じいじが、

「よりみちしねえで、まっすぐかえつてくんだけぞ。」

といわれていたことを、おもいだしたからです。じいじが、しんばいしていつてくれたことにカナセミにあつて、きがつきました。じいじは、いつもわたしが、ほしいものをみつけてくれたり、かつてくれます。そんなじいじがだいすきです。

じいじは、にわをたいせつにしています。たくさんはなをうえてあるので、わたしも、はなのみずかけのおてつだいをすると、

「かな、ありがとな。」

えがおで、いつてくれます。いままで、はずかしくて「ありがとう」と、いえなかったので、これからは、げんきよくいたいんです。

ありがとうとんとん

愛知県
豊橋市立つじが丘小学校二年

のぐち ゆうき

おねえちゃんたちがつたないながらつくりまします。

ほくは、おふるあらいとたまにさらあらいします。それとちようびにあさいちのやすうりに、たまごひとりひとばつくとを、5、6にんでいくので5ばつつかいませう。

でも、れじのひとに、たまにとめられ、ひとり1ばつとですよ、といわれます。でもとんとんは、おみせのひとをにらんで6にんいますと、ちようとおごつていませう。ほくは、そんなとんとんをみていると、すごいなとおもいます。ほくは、あさもとんとんにおこされませう。がつこうぐみは、みんなおこされ、ごはんだべなさい、わすれものはないととんとんからいわれませう。でもときどきなまえをまちがえたり、たのんだぶりんとにはんこうがおしてなかつたりしませう。

ほくのおかあさん、とんとんはほくたち9にんのきようだいのために、あさからよるおそくまではたらいてよるになると、かたがいたいたいといませう。ほくは、たまにかたをもみませう。かたはほくがちからいつばいもんで、かたくてもめません。でもとんとんは、きもちがいいといませう。

とんとん、まいにちほくたちのためにがんばつてくれてありがとう。ほくが、おおきくなつたら、らくをさせてあげたいです。だいすきなおかあさんととんとんほんとうにありがとう。

ほくのいえは、てれびでみるような、だいかぞくです。ほくのかぞくは、おとうさん、おかあさん、おにいちゃんふたり、おねえちゃんさんにん、おとうとひとり、いもうとふたりの11にんかぞくで、ほくは9にんきようだいのうえから6ばんめです。

とんとんは、ほくのおかあさんです。なぜとんとんとよぶかというと、すごしふとつているから、おかあさんに、ちよくせついうとおこられるのでおかあさんに、きこえないようにかくれてとんとんとよんでいます。でもたまに、とんとんとよんだのがきこえると、おかあさんは、9にんもこどもをうんだからしょうがないとすごしおこつていませう。

とんとんはせかいでいちばんすごいとほくはおもいます。

とんとんは、あさ、ほくたちよりはやくおきて、よるほくたちよりおそくて、よなかに、ほくがといれにおきると、いちばんしたのいもうとしおに、いつもみるくをあげたり、だっこをしてなきやましています。せんたくきは、ほくたちのふくがいつばいでまわりばなし、いえのなかは、ほくたちきようだいがあはれまわつて、ちらかしたり、おとうとやいもうとが、ものをこわしたりしてへやのなかがぐちゃぐちゃになつてしまつたものをほくたちをおこりながらとんとんがほとんどかたづけをします。ごはんのしたくも、おおきななべで

「永遠のライバル」

愛知県
名古屋市長村雲小学校三年

尾藤 和歌

お姉ちゃんの前にして「ありがとう。」だなんて、絶対に言いたくない。だって、お姉ちゃんは私のライバルだから。

お姉ちゃんは今、中学一年生。で、たった一人の妹、私は小学三年生。お姉ちゃんは、いつもみんなを笑わせるのが得意で人気者だし、勉強もよくできる。

でも、負けたくない。

私が小学校に入学した頃、お姉ちゃんが、「社会科って、歴史の年代とか人物名とか、いろんな国の名前とか暗記ばかりで、ちょっと苦手かも。」とボロボロと言ったことがあった。それに、絵を描くのも好きではない。そんなことを意識したからかは自分でもわからないけど、私はお姉ちゃんがあまり得意じゃないものが得意だったりする。

日本の歴史は家のかべに貼ってある年表を毎日見ていたら、だいたい暗記できた。トイレに貼ってある世界地図も何度も見るから、国とその首都の名前を百五十か国くらい覚えたい。絵を描くのは、私も自分としてはあまり好きじゃないんだけど、お姉ちゃんよりは人から上手って言ってもらえる。

毎日、お姉ちゃんの答えられないような問題を作ってだ出す。とくに、お風呂に入っている時。お姉ちゃんがわからないくてトンチンカンな答えを言う時が、とつてもおもしろい。

「アルジェリアの首都はアルジェ、ではナイジェリアの首都は？」
「ナイジェ。」

「いつも、ありがとう。」

群馬県
富士見村立時澤小学校四年

磯田 和也

ぼくが生まれて、お母さんの手は、いつもいそがしい。

それは、そうじ、せんたく、食事の用意など色々とあり、仕事でつかれていても、ぼくのために、九年間休まず、夜ねる前にならず、マッサージをしてくれます。

ぼくは、生まれた時に両手の指や片足が悪かったからです。先天性の病気です。お母さんは、そんなぼくのために、指が良く動くように、小指の指の骨が、かたくならないように、片足が悪いので、体育や歩いたりすると二日のつかれとなつて、こしが痛いそんな、ぼくのために、夜、ねる前には、マッサージをしてくれるのです。

ぼくは、自分の体が、時々、キライになる時があります。それは、みんなにできて、ぼくには出来ない事です。

それは、幼稚園に入つて、ハサミが良くにぎれず切れないかったり、ピアノも、もつ手が良く使えず、ケンパンも、指のバランスがとれず、おせず、小学校に入つて、くやしかったのは、リコーダでした。ひらいてしまう指が、あなからずれてしまうのです。

「ブーッ。そう言うと思った。アブジャだわ。」

「承久の乱で幕府にやぶれた後鳥羽上皇は、どこに流されたでしょう。」

「おき。」

「ピンポン。ちえつ、すごいじゃん。何でそんなの知つたのお。」

「えっ合つてるの？へんな問題。流されるつていつたら、おきに決まってるじゃんね。」

お姉ちゃんは、正解の隠岐じゃなくて、沖だと冗談半分で答えていたのだ。

毎日こんな調子でお姉ちゃんと遊んでいたある日、お姉ちゃんが中学から帰ってきたら、「和歌ちゃん！社会の中間テスト、お姉ちゃんだけ百点だったよ。ありがとう！」って、すごうれしそうに言った。ありがとうって言われたこともあるのかな。それよりもたぶん、お姉ちゃんが、むしろかしい中学の社会のテストで百点とれたことがうれしかった。ライバルなのに。でもライバルだから、「ふん、つまらん。百点なんてどうで。」なんて言ってしまった。お姉ちゃん、おこるかなって思つたら、「べえつ。」とおもしろい顔をさせてわらっていた。私ももつとへんな顔をつくつて、お姉ちゃんに見せてやった。

お姉ちゃんは私に、「ありがとう。」って言ってくれる。でも私はお姉ちゃんに「ありがとう。」だなんて言わない。でもね、お姉ちゃん。ありがとう。

そんな時も、毎日のマッサージをするお母さんの手に、ぼくははげまされます。

何せだろう。とつても、あたたかい気持ちになります。

そんな、お母さんに、「手がかれてない。」と言ったら、「和也は、マラソンせんしゅになれなくつても走る事が出来るし、手が悪くつても、はしも、えんぴつも、ハサミだって使える。世の中には、たくさん和也より大変な人がいる。友達が、一回で出来る事が、和也は二回三回かもしれないけど、やれば出来るから、がんばつてね。」と言つて、「お母さんのお中の中で、ちょっとした交通事故にあつちやつたけど、せつかく生まれたのだから、自分を大切にしておだやかに、みんなの和に入つてほしい。痛みがやわらいでほしいと、和也と、名前をつけたの。」とお母さんが話してくれました。ぼくは、お母さんに、「毎日ごろうさま、ありがとうね。」と、はずかしかったけれど言いました。お母さんは、泣いてしまいそうな感じでした。

最後の「ありがとう」

東京都
港区立青山小学校四年

竹俣 紅

私のおじいちゃんは、私が小さい頃から色々なことを教えてくれました。

一番の思い出は、釣りが好きだったおじいちゃんと釣りざおを使って釣りごっこをしながら、たくさん魚の名前を言い合っことです。おかげで私は、たくさん魚のことを知ることができました。

一緒に住んでいるのに、おじいちゃんとお手紙交換をしていたおかげで、手紙の書き方も自然に覚えることができました。小さい時にかいた、とても絵には見えない絵やミズのような字で書いたお手紙をおじいちゃんは誉めてくれて、自分のお部屋のかべに貼ってくれて、まるで展覧会のようにしてくれました。

でも、私はそれが嬉しくて、絵を描くことが大好きになったし、手紙を書くことが習慣になりました。

私が将棋大会で入賞してもしなくても、いつも「頑張りましたね。すごいですよ。」と言ってくれました。

東京の代表になれた時も、「素晴らしい。いつもの勉強の結果ですね。」と誉めてくれました。

今、考えたとおじいちゃんつて、よく私を見ていて、私のやる気をいつも引っぱり出してくれていたんだと思います。

でも、おじいちゃんは、もう家にいなくなつてしまいました。

おじいちゃんが亡くなった時、私もそばにいました。眠つていただけのようでした。

おそう式の時、焼かれてしまうおじいちゃんに最後のお別れをしなくちゃならなくなりました。

今までのおじいちゃんとの思い出がぐるぐるまわつて、絶対にさよならをしなくては涙が止まらなくなりました。

私は、あまり声を出せなくなつてしまつたけど、

「また会おうね。ありがとう。」

と自分の心を二生懸命、声にしました。

しばらくして、骨になったおじいちゃんに会いました。それは、少しピンク色がかった白いサンゴのように見えました。私は、人の骨だつたけど、全然怖くありませんでした。だつて、おじいちゃんだから。

海釣りが好きだったおじいちゃんだから、サンゴになつて良かったと安心しました。

そういえば、俳句の作り方を教えてくれたのもおじいちゃんでした。

「また会おう」

サンゴになつた

おじいちゃん」

じいちゃんのような男になるぞ

千葉県
南房総市立岩井小学校四年

森 龍人

ほとんどのじいちゃんは家族のみんなにせっかちだと思われているけれど、ぼくはじいちゃんの本当のすがたを知っている。

ほとんどのじいちゃんは魚屋をやつていて、魚の切身をもくもくと、すごく早く切る。あじの干物を百枚、二百枚作る時はまるでロボット、いや、それより早く包丁を動かして、あじはすばつとべたんこに変身する。とにかく早い。じいちゃんのはのろのろしていない。それから夕ご飯がまだできていなくても、六時きつかりにすわつてしまう。だからおばあちゃんに、待つてよ、せっかちねえと毎日怒られる。

ぼくと一緒に銚子電鉄に乗りに行った時は、何時何分の電車に乗り、何分に乗りかえ、どの駅で昼ご飯にするとか書いたメモを持っていた。時間通りじゃあないと気がすまないらしい。病院に行つても待つのがきらいで帰つてきてしまつたりする。たぶんあわただしい市場ではてきばきとしていないといけないから、ああしてせっかちでじつとしていられないのかも知れない。

ぼくはあの日、全くちがつた顔のじいちゃんを知つた。

じいちゃんは、ぼくが大丈夫だよと言つても毎日軽トラックでむかえに来る。だから今日は時間割り通りの四時下校だよと言つて出かけた。ぼくは体育委員なので、帰りがおすくなることを言い忘れてしまつた。委員会があることをすっかり忘れていたのだ。もう五時近くなつていて、でも体育館の横をのぞくといつも通りじいちゃんが軽トラックで

待つていてくれた。ラッキー、ぼくはうれしくなつて走りながら手をふつた。じいちゃんが車のドアを開けてくれて、ぼくは飛び乗つた。ジュースを持てきてくれていたので飲もうとしたその時、そのペットボトルは、今から冷ぞう庫に入れるのかなあ、というぐらゐにぬるかつた。

ぼくは考えた。きつとじいちゃんは四時からずつと待つていたんだ。一時間近く、ずつと、四時終わりなのに今日はおそいなあ、と待つていたんじゃないだろうか。

もう四年生だからはずかしいよ、友だちと帰れるし、学校から近いからむかえに来なくてもいいよ、そう言うつもりだつたけれど、ぼくは言うのをやめた。そしてきちんと帰る時間を確認してから学校に行くことにした。

じいちゃんみたいに。

今は、よいしょよいしょと坂道を歩いて来て、信号の少し手前で待つていてくれる日もある。ぼくが下つてくると、もう汗をふきふき立っている。じいちゃんが見える。

「おう、ちょうど今来たところだ。お帰り。」

必ずそう言うけれど、きつと早くから待つていてくれたこと、ぼくには分かっているよ。

いつも心配してくれるじいちゃん、ありがとう。「一緒に帰るの大好きだよ、今日はどんな話をしようかな。」

ごつごつして、きちんとして、約束を必ず守るじいちゃん似になりたいなあ。

だいすきなおにいちゃん

千葉県
千葉市立星久喜小学校一年

こいずみせりな

わたしのおにいちゃんは、しょうがく3ねんせいで、じゅうどしうがいじです。ひとりで、たべたり、のんだり、あるいたりすることができません。ことばも、はなすことができません。でも、わたしは、おにいちゃんのこと、だいすきです。いつも、かぞくみんなで、おにいちゃんのみまわりのおてつだいをします。

おにいちゃんにも、できることがたくさんあります。あさ、めをさますと、ろけつとみたいに、とんでいきそな「のび」をします。そのすがたをみて、かぞくみんながわらいます。「せいやくーん」と、なまえをよべば、「はーい」のくちのかたちをして、へんじをします。そして、たまに、おおきなこえをだして、ためいきをつきます。すると、また、かぞくみんながわらいます。くしゃみをするときも、とびうおみにたいに、からだがあふつとびます。そしてまた、かぞくみんながわらいます。

おにいちゃんが、いつもけんこうでいることは、とてもた

いへんなことだと、わたしはおもいます。だから、わたしは、じぶんのできるおてつだいを、まいにちしています。おにいちゃんが、うんちをただけでも、かぞくみんながよるこびます。おにいちゃんが、すこし、こえをだしただけでも、かぞくみんなが、よろこびます。おにいちゃんが、わらったかおをしたときも、かぞくみんながよろこびます。

わたしは、いつも、こうおもいます。おにいちゃんは、なにもいわないけれど、いつもかぞくをみまもってくれている。そして、からだがあふじゆうでも、がんばっているおにいちゃんを、いつもみているから、わたしは、つらいことがあるときでも、それをこえて、こえて、はしっていくことができる。

おにいちゃん、わたしを、いつもげんきにしてくれて、ありがとう。そして、いつもかぞくを、あかるくしてくれて、ありがとう。

おとうさんありがとう

鹿児島県
鹿屋市立上小原小学校一年

上こくりようしん一

ぼくのおとうさんは、ゆうびんはいたつをしています。

おとうさんは、なつになると、とてもおおきなすいとうをもつて、しごとにいきます。

そのなかに、たくさんのこおりとむぎちやをいれて、もつていきます。そのすいとうから、

「カランコロン、カランコロン。」
と、おいしそうな、おとがします。

ゆうがた、おとうさんが、かえつてくると、すいとうのなかは、いつも、からつぽになつています。

おとうさんに、
「せんぶのんだの。」

と、きくと、おとうさんは、

「ああ、きょうも、あつかったからなあ。」
と、いいます。

ぼくは、おとうさんが、おおきなすいとうをもつて、しごとに行くのが、わかつたがします。

あついなか、ずつとそとでしごとをしてきているおとうさんへ「ありがとう。」というきもちで、いっぱいです。

おとうさんは、「てがみを、まっているひとがいるから、あつくても、さむくても、あめでもはいたつしなないと。」
と、いいます。

ぼくも、おおきくなつたら、みんなのおもいが、たくさんつまつたてがみを、まっているひとのところへ、とどけたいです。おとうさんといっしょに。

ありがとうお母さん

京都府
与謝野町立山田小学校 二年しお見^みり子^こ

わたしのお母さんはひとことというとき、きつと出あったことがないくらい、おによりこわいお母さんです。すぐがんばりやさんで、いつも、いそがしそうにはたらいています。

「お母さんはきつと、止まると死んでしまうかもー。」と言っています。

でも、動物が死んでしまうテレビとかを、いつしよに見ていると、タオルをかた手に、なみだをふいています。だれよりもこわいようにだけと、なみだもろいお母さんです。

朝、家ぞくの中で、「ぼん早くおきてはたらきはじめるのが、お母さんです。そんなお母さんは、かんこしをしています。

わたしたち三人を学校におくり出すと、弟をほいくえんにつれて行きます。

さいきんでは、

「ガソリンも高いし、エコつうきんよ。」

と、わらいながら、じてん車でびょういんへ出かけます。

そんなお母さんは、仕ごが大好きです。白いきがえると、気分がしゃきつとするのだそうです。この仕ごをはじめて、もう二十年がすぎたそうです。

わたしも時どきねつがでると、お母さんのはたらくびょういんへ行って、点をきしてもらいます。

びょういんではたらくお母さんは、とてもテキパキしてい

て、手をうごかしながら先生のしじを聞いて、どうじにいろんなことをしています。家で見えるお母さんとは、ぜんぜんちがう人ようです。

わたしのいえでは、ねつをだしたりして体ちようのわるい人は、お母さんとなりでねることになつています。

わたしは、そのときがぼんうれいしいです。いつも弟がお母さんをひとりじめして、わたしが行くとおこるから、いつもがまんをしています。でも、ねつがあるときは、お母さんをひとりじめできるから、うれしくてしかたがありません。

このまえ、お母さんが、頭がひどくいたくて、ねこんでしまいました。

「お母さん、だいじょうぶかな。」

と、心ばいでやるもねむれませんでした。

きょうだい四人で、力をあわせて、おてつだいをしました。せんたく、そうじ、弟のおふろ、きがえなど、たくさん仕ごがありすぎて、とてもたいへんでした。

四人がいくらがんばつても、お母さんのようにはできませんでした。

だから、今、おもいます。

「お母さん、ありがとう。」

お母さん、大好きだよ。

いつまでも、いつまでも、元気でいてね。」

入選

がんばるおとうさん

富山県
砺波市立砺波北部小学校 二年

いまい しゅん

ぼくのおとうさんのおしごとは、かわらやさんです。

夏には毎日

「あついあついあつくたおれそうだ。」

と言つてかえつてきます。じめんでもすこくあついのに、やねの上は、なんどだろうとぼくは思います。こんなにあついのにやねの上でおしごをしていてえらいなあと思います。

ぼくがうさぎのとき、おしご中におとうさんは、やねからおちました。そのときでんわがかかつてきて

「びょういんにはこばれたのですぐきてください。」

と言われました。ぼくは、すこくふあんになりしんばいできそうでした。おかあさんもしんばいそうな顔をしています。弟は、よくわかっているのか、

「どこいくが?」

と言っていました。

おかあさんとぼくと弟はいそいでびょういんに行きました。

とおいびょういんだつたのですこく長くかんじました。びょういんにつくとおとうさんは、ベッドの上で、

「しゅんきたがあ?。」

とにこつとしながら言いました。ぼくはすこしほつとしました。あたまをぶつけてけんさのためにびょういんにはこばれたそうです。手と足もぶつけていたのではれていてかわいそうでした。でも「目でたいいんできたのでうれしかったです。

夏になるとまたやねからおちたらどうしようとしんばいになります。学校の近くで、やねのしごをしている人を見るとおとうさんがいなかなああと見えています。毎日あつい中、ぼくと弟のためにおしごをがんばるおとうさんは、すこくかっこいいです。ぼくも、おとうさんみたいにかっこいい男になりたいです。

ぼくには二つ上のお姉さんがいる。名前はもも。ももはぼくと同じで、背が小さい。それなのにぼくのことを「ちび。」

と言う。それでけんかになる。かならず二回はけんかや言い合いをする。ぼくはももがいなければいいと思っていた。

この間も何が何回も、うそをつけておこられた。何時間もおこられて、さいごには、

「でていきなさい。」

とどなられた。その時ぼくは、こわくなって耳をぎゅつとふさいでいた。かがが、

「ももにさようならを言いなさい。」

と言った時なぜか体があつくなくなって、あせびつしよりになった。そのあと、なみだが出てきたので、目をパチパチさせたり、大きくしたりしてなみだがたれないようにした。なぜならなみだの顔を見られたくなかったからだ。だけど、あとからあとからでてきてしまっとうとうポロンとほっ

べたに、たれてきた。そのあとはベッドに顔を付けていっばいないた。いつもはいなくていいと思ったりするけど、なぜかなみだがあふれてきた。

やつぱりぼくは家にももがいた方がいいと思った。泣いている時に、おかしを分けてくれたこと、泳ぎを教えてくださいましたこと、ももの友だちの家に「しよにつれてつてくれて遊んでくれたこと、勉強を教えてくださいましたことなどいろいろなこと

を思い出した。ぼくが入学した時

ももが、学校にいたからとても安心だった。

ぼくは、ももに「ありがとう。」と言っていたかな。今まで気づかなかったももへの感しやの気持ちになみだといっしよに次から次へとあふれて来た。

このことはももにとっておしおきだったけど、ぼくにどうしてはももへの感しやの気もちを考えさせられた出来事だった。あまりにも言いたくないけど、今日とはとく別だよ。

「もも、いつもありがとう。これからもよろしくね。」

入選

大好きネーネ

広島県

学校法人鶴学園なぎさ公園小学校三年

長田 華穂

「どんな!?」

保健室にとびこんできたネーネ(姉)は、いきなりさげびました。

休けい時間に高い竹馬から落ちた私は、竹馬の足を乗せるところにまたの辺りをぶつけ、たくさんの血がでて保健室へ運ばれていました。

私が「だいじょうぶよ」と答えると、ネーネは、少し泣き出しそうな顔になりました。

私がかかされていたベッドの近くの台の上には、保健室の先生がはきかえさせてくれる前の血だらけの下着がナイロンぶくろに入れてありました。

私は、ケガをした部分はずかしくて、「あの下着を友達に見られたらどうしようかな」と心配していたのですが、ネーネは、何も言わずにネーネのポケットへ下着をしまってくれました。

ネーネのおかげで、私の様子を見に来てくれた友達には、血だらけの下着を見られずにすんだし、「どこをケガしたの?」と聞かれても、「ちよっとね」とかくす事ができました。

しばらくしてお母さんがかけ付けてきて、私は、車で病院まで運ばれました。ネーネも付いて来てくれました。

病院では、かんごふさんが、「ご家族の方は、待合室にいて下さい」と言いましたが、ネーネは、首を横にふり続け、ずっと

私のそばにいてくれました。

私は、とても心強くて、うれしくて、ネーネの手にぎっていました。

いつもは私に、やかましく注意ばかりするネーネなので、一日に一度は必ず頭にくるけど、でも「大好き」と感じる事もたくさんあります。

少し前に、「宿題をやらなきや、宿題をやらなきや」と思いながらもゲームをやめられずにとやっついてお父さんからきびしくおこられた事がありました。その時ネーネは、「そんなにきつくおこらないで!今宿題を始めようと思っ

ていたはずなんだから!」と私をかばってくれました。

私は、その時の事を思い出して、ますますうれしくなっ

てネーネに笑いかけました。

「ネーネ、今日はいっしょにねてね」と私が言うと、ネーネは、「はいはい」とお母さんのような返事をしました。

いつもは、やさしいところをあまり見せてくれないネーネ。でも私にこまった事があったら、かならず助けてくれるネーネ。そして今日何も言わずに下着をポケットへしまっ

てくれたネーネ。

いつもははにかしくて、「ありがとう」とはとても言えないけれど、今日だけは勇気を出して、ネーネに「ありがとう」と言ってみようと思っていました。

お母さんのハンドパワー

沖縄県
石垣市立石垣小学校 三年

大瀧 倫花

「倫花、今日もマッサージしようか。」

「毎ばん、お母さんはマッサージをしてくれます。マッサージの方ほうは二つあります。」

「二つ目は、声かけマッサージです。私の頭から足の先までさわつてなでなでしながら、

「いっぱい色んなことをお勉強したね。」と言います。目をさわると「たくさんいろんなものを見たり、読んだりしたね。」耳をさわると「たくさんさんの音やたくさんさんの人の言葉を聞いたね。」と言います。

お母さんの手は、かた、せなかとだんだん下におりてきます。おなかのところでは、「今日食べたものがえいようとなつて大きくなあれ。」と言います。手はねんいりにしゃべりながらもみもみしてくれます。

二つ目は、マッサージと言つても手をかぎすだけ。なのに心と体がとつてもほんわかしてあつたかい気もちになり、私はすぐねむくなつてしまうのです。

「何で、手をかぎすだけで気もちいいの。」

私は、お母さんにたずねました。

「料理をつくつたり、せんたくしたり、ごみをすてたりきたないものでも平気で使う手だからだよ。」

と答えてくれました。

なるほど、いろんなことをがんばつてやっている手だからパワーがあるんだとなぞはとけました。

お母さんの手は、小さくて太くて、けつしてネールアートやマニキュアには合わない手だけれどとてもあつたかいむちむちした手です。

お母さんは心が広く、やさしく、あたたかく、明るい人です。だから、私はお母さんの手のことをハンドパワーとよんでいます。

そのハンドパワーをもらうととてもいいゆめが見れるし、朝起きるとなやみはかいつ体のいたかったところもなおります。何より、学校でしっかりと勉強ができ、友達とも仲よく遊べて、せつこうちょうな一日となるのです。

そんなある日、お母さんがけつこんしきによばれました。つめにピンクのマニキュアをぬっていました。ふしぜんだけとせいらばいのおしゃれをしているお母さんに、

「すてきだね。」と言いました。

お母さんはにっこりわらっていました。

しかし、よく朝にはマニキュアがすっかりきえ、いつものお母さんの手にもどっていました。

その手を見て私はほつとしました。

今日も、明日も、お母さんの手はやさしくあたたかく、私の心と体をつつみこんでくれます。

「ああ、いい気もち。明日もマッサージしてね。」

と今日も私はお母さんにあまえます。

「お母さん、いつも本当にありがとう。」

入選

ほくの応援団長、大ちゃん

栃木県
栃木市立国府北小学校 四年

齋藤 黎明

弟の大ちゃんはいつもノー天気な顔していつもほくのそばにいる。今日も大ちゃんはこの炎天下の中、片道車で二時間もかかるほくのテニスクラブについてきてくれた。

「暑い。なんとかならないの〜」

「のどがかわいた。ジュース〜」

ついでに文句も言っている。夏は暑いし、冬は寒いし、そんなこと一年生になつてわかつてるんだから、おとなしくおばあちゃんちで待つていれればいいのに。

「ぼくがあーくんを応援すれば、あーくんはもつと強くなるし。」

とかなんとか言つて一緒に来るんだ。金色のボンボンまで持つて。ちなみにテニスでは、練習どころか、試合でさえ、は手な応援は禁止なので、今だ、お目見えしたことはない。

でも今さらだけど気付いたんだ。大ちゃんはいつもぼくをはげましてくれてること。ぼく達は取っ組み合いのケンカをよくするけれど、大ちゃんはぼくのことをバカにしたことはない気がする。テニスでコーチに注意されることも

たくさんあるから、ぼくのカッコ悪いところを当然見てるはずだし、試合だつてみつももなく負けることもある。でも終わった後、「きつと次はできるよ。」と必ず元氣付けてくれるんだ。大ちゃんから言われると、今できないことが、次は本当にできるようになる気がする。かなりうれしし、自信も安心もまた出てくる一言だ。

ぼくを信じてくれてありがとう。

その、ほくの応援団長の大ちゃんが、近々入院・手術をすることに。ナマイキに

「ぼく一人で手術して入院してるから、大丈夫だよ。たまにお見まいに来てくれれば。」

なんて言っている。

お前、何言ってるんだ。しつこいくらい病院に行くから、かくごしとけよ。

手術の日は、ぼくが金色のボンボンを持つて応援に行くからな。きつとうまくいくから安心して大丈夫だぞ。がんばれよ、大ちゃん。

大切な由美ちゃんへ

兵庫県 南あわじ市立北阿万小学校 五年 正木 太樹

ぼくは、お父さんの妹が七月に結こんして、いつも会っていた人が家からいなくなったらこんなにもさびしいと言う事に気が付きました。

ぼくがいつばいいいじわるをしても何もおこらないで遊んでくれたり、おくりむかえをしてくれたり、勉強を教えてくれたり、とつてもやさしい由美ちゃんでした。そんな由美ちゃんが結こんすると聞いた時、うれしかったけどものすごくさびしかったです。ぼくの由美ちゃんじゃなくなると思ったからです。結こんする前にぼくは由美ちゃんに今までのお礼をしたかったのですがお母さんに何をしたらいいのか聞きました。お母さんは「あんたがしてあげたいと言う気持ちが一番のプレゼントになる。」と言ってくれて、考えたのがケーキを自分で作ると言う事にしました。スポンジは、むずかしいので買ってきたスポンジに生クリームをつけて、イチゴを切って色もなくだもののをせて由美ちゃんが大好きなハート型に切り抜いたスポンジも置いて、ありがとう。とメッセージを入れました。見た目はあまりきれいじゃなかったけど、「上手にできとるやん。ありがとう。」と

言つてものすごくよろこんでくれました。

ぼくが思っている事を言うのははずかしいから手紙に書きました。由美ちゃんは、ぼくが帰ってからへやで一人で読んで「ありがとう。」って泣いたと言っていました。ぼくは、結こん式では泣かないと決めていました。でも、由美ちゃんが泣いているのを見て知らないうちになみだが出てきました。小さい時から今までの事を思い出ししました。

ぼくは、初めて大好きな人がいなくなるとこんなにさびしんだと言うことがわかりました。いつも一つしよにいるとわからなかった事も別れる時にはわかるんだと思いました。お母さんに言うと、「だから、友達は大事にしないといけない。自分が人にしてあげる事は、必ず自分にかえてくる。いい事も悪い事も。」と言われました。ぼくは、こんな気持ちになったのは初めてなので由美ちゃんも同じ気持ちでいてくれてると思うとうれしいです。今までいつばいいいじわるした事、ごめんさい。いつばいい遊んでくれてありがとう。ぼくはこの気持ちに気づいてうれいので大事にしていこうと思いました。

入選

オタンコナスありがとう

福島県 郡山市立安子島小学校 五年 前田 颯斗

ぼくの母さんは、かん護師です。家では、自分のことをオタンコナスと呼んでいます。いつもは、とつても家事が得意な母さんです。特に料理が得意です。ぼくのおやつに、アップルパイやタルトを作ってくれます。甘い物好きの父さんと取り合いながら食べています。でも、ハンバーグに玉ねぎを入れ忘れるような変な失敗をすることもあります。そんな母さんを見ていると病院で働いているときに、変な失敗をして、本当にオタンコナスになっているんじゃないかと心配になります。

今から四年前の一年生の時に、一回だけ、父さんと母さんの職場に行きました。母さんの働く姿をこつそりのぞきました。その時の母さんは、てきぱきと真剣に仕事をしていました。その姿を見て、ぼくは、家にいるときの母さんとはかなり違うことにびっくりしました。家では、自分のことをオタンコナスと呼んでいるので、大じょう夫かなと思っていました。けれども、まじめに仕事をしていたので安心しました。

ふだんの母さんは、「颯斗が大きくなら、やりたい。」と言つていた料理教室とパン教室に通い、料理のレパトリーをふやしています。ココナツミルクを使ったエビカレー、生春まき、あんドーナツ、マドレーヌなどを作ってくれます。特にエビカレーは、家族三人でキャンプの時に外で食べると、味がまるやかになり最高です。

母さんは、ぼくと言い争いになると、口ぐせの、「もう何も作つてあげない。」と言います。けれども、すぐに機げんを直しておいしい料理を作ってくれます。ぼくは、次はどんな料理を作ってくれるのかなあと楽しみにしています。

最近、ぼくは新しいゲームを買ってもらい、母さんは、ぼくと一つしよに、ゲームをやり始め、いつの間にか、ぼくより母さんが、ゲームの取り合いでけんかになってしまいます。そのけんかを見ている父さんは、「二人は、まるで姉弟のようだ。」と言っていました。母さんも、「颯斗は、ひとりっ子だから、お姉さん代わりをしてあげてくれるの。」

と都合よく答えています。ゲームの話で盛り上がる事ができるので、母さんと話をしていると楽しいです。ぼくは、自分のことをちよつとドジなオタンコナスと言つている母さんが大好きです。

かん者さんの命を預かる大変な仕事をしながら、料理教室に通い、父さんとぼくの世話もしている母さんは、本当にすばらしいです。母さん、いつもありがとう。いつまでも料理上手な健康な母さんでいてください。

カチコチ カチコチ

時計の音が静かにひびく。家にいるのはわたしと母だけ。落ちついて本の世界に入りこめるこの静寂な時間こそが、わたしの宝物。ところがそのとき、

トントントントン

階段を駆け上ってくる足音が聞こえてきた。妹が帰ってきた!

「ただいま」

そのとたん、家の中に音が生まれる。スピーカーのスイッチが入った。そんな感じだ。

妹は、家の中をドタバタと走って移動する。決して歩かないのだ。走っているから家中の柱や家具に何度も激突しては、「いた〜い!」

と悲鳴をあげている。

妹の口はねているとき以外に休むということを知らない。勉強しているときも、本を読んでいるときも、トイレでおしっこをするときさえ歌ったり、しゃべったり、口笛をふいたり、妹の口は大忙しだ。「機関銃のようにしゃべる」というのはウソではないのだ。

しかも、その口は、数分おきに、

「おねえちゃん、見て、見て!」

「おねえちゃん、あそぼう!」

「おねえちゃん、これあげる!」

と、わたしに話しかけてくる。さすがに、

「もう、うるさ〜い!!」

と言ってしまふ。わたしだけでなく、家族みんなから言われてしまうのだ。

ところが、今年の夏。妹が全く話さない日が二週間も続いた。妹が高熱を出して眠り続けたのだ。

生まれて七年間、熱を出しても起きて遊んでしまうこまり者だったのに。今回は全くちがった。ごはんもほとんど食べることができず、しゃべるところかこんこんと眠り続けた。

家が静かすぎて悲しかった。聞こえるのは妹の寝息だけでさびしかった。ごはんを食べるときも、だれも話をしないうでただモクモクと食べるだけで、楽しくなかったし、味気がしなかった。

「おねえちゃん、遊んでー。」

と言ってもらえなくて、つらかった。

妹は、音で家族に元気を与えてくれていたのだ。妹が作り出す音が、わたしたちに表情を与えてくれていたことに気がついた。妹が話すことに笑い、妹が歌う歌に心がほっとし、「遊んで」をお願いにすぐうたい喜びを感じていたのだ。食事を楽しくおいしく感じさせてくれたのも妹だったのだ。ただ、「うるさい」だけではなかったのだ。はじめて、うるさい妹に感謝したいと思った。

熱が下がった妹は、元気になってまた、朝起きたときから、夜ねるときまで、一日中、音を作りだしている。

妹よ、うるさいぞ!!でも、うるささが、家族に幸せをあたえてくれる。ありがとう!!

入選

「ありがとう」の代わりに

東京都
私立聖徳学園小学校六年

山田 このみ

「いつてきます」

「父さん、今日は帰ってくる?」

「おう、そのつもりだけど」

「じゃ算数教えてね、いつてらっしゃい」

父は、自宅から五十分かけて自転車で職場へ向かいまします。父を見送ってもどつた母が、

「そんなことばかり言つて、たまには「いつもありがとう」と言つてみたら」と言いました。私は、「そんなの別にいいじゃん!」と思ったのですが、母を怒らせたくなかったので「は〜い」と小さく言いました。

私の父は、小児科の医師で、少し離れた病院で働いています。なので、今朝約束をしてもだいたい私の願いはかまいません。幼稚園の頃、私と兄は仕事へ向かう父に、泣きながら「また来てね」とベランダから手を振って見送っていました。また、家族で出かける朝に病院から電話があつて、予定が中止になったりしてよく私は兄と泣いていました。最近では、家に帰ってくることも多くなり、時間があると遊んでくれたり、私の自転車のかが壊れて困っていると、知らないうちにかがを修理してくれたりします。とても優しい父だけど、夏休みが終わつて、友達の家旅行の話を知るとやつぱり私はうらやましく思いながら、そして「しようがないか」と小声で言うと思います。

去年の夏、私と兄は父の働く病院へ忘れ物を届けに行った

ことがありました。私達は、邪魔にならないように父をさがしました。大きなガラス窓から病院を見てみると、のどから管を通して器械につながった子の胸に聴診器をあてている父を見つけました。父は、私達に気が付かないらしく、厳しい顔でその子の手に触れて声をかけていました。あんな真剣な父の顔を見たことがなく、私は怖くなって、ずっと見ていることができませんでした。戸惑っていた二人を看護師さんがある部屋へと案内してくれました。そこには父の机があつて、パソコンを見ると、画面いっぱい兄と私の幼い頃の写真がありました。父が私達のことをここで見てくれたことを知りびっくりしました。そして、はずかしい気持ちとうれしい気持ちになつて「しようがないな、父さんは」と二人で笑つてしまいました。

家族でテレビを見ていて、私が「常習犯つてなに?」と聞いたことがありました。すると兄が「悪い事を繰り返してしまふ人の事だよ。たとえば、「父さんは約束を破る常習犯」みたいにね。」つていたずらっぽく言うど、父も「それを言うなよ」と笑つていました。父の「約束を破る常習犯」は、これからも続くと思います。そして、私達はそれを「しようがない」と小声で言つて許してあげます。私は、父に「ありがとう」と言えない代わりにまた、破られる約束をしようと思います。

「今日は花火するよ!早く帰つてね、父さん」

「おう、行つてきます」

パパ、いつもありがとう

東京都
私立清明学園 六年

中村 朱里

「パパ、くつ下に穴があいてるよ。」

「あけているの。通気性をよくするために。」

「パパ、かたい臭がするよ。」

「インドカレー臭？ パパそんなにおいしいにおいがするの？」

「パパ、さっき、おじいちゃんがステテコ姿でウロウロしてたよ。」

「ステテコはいてたんでしょ。何もはいてなかったわけじゃないんでしょ。だったら、よかった。」

「あかり、学校で勉強してきたのに、どうして、家でも勉強しているの？」

「だって宿題だもん。」

「パパ、あかりは勉強が大好きなのかと思ったよ。」

「パパ、仲のいいお友達ってどうしたらできるのかな」

「えっ、お友達がほしいの？ パパがいるのに。」

父と私のいつもの会話です。父と話していると、私が予想

入選

びつくりをありがとう

福岡県

福岡教育大学附属小倉小学校 六年

黒木 郁臣

父のポケットには、たくさんのおびつくりがつままっている。そして、まるでマジシャンのように、いきなりそのびつくりを取り出しては、ぼくや弟におどろきと喜びを感じさせてくれる。

先日、東京へ家族旅行をした時は、お母さんも一しょにびつくりさせられてしまった。その日の夕食は、ぼくの大好きなちゃんこなべ。父のおすすめの店へ向かうと、そこにはせの高い男の人が立っていた。そして、ぼく達へ笑顔で手をふっている。何とその人は、母の弟、つまりぼくのおじさんだった。ぼくも弟もびつくりしたけど、「一番おどろいたのは母で、現実が理解できない顔になっていた。」

「どうして？ 何で？」

とたずねるぼくに、おじさんは笑いながら、

「お父さんが呼んでくれたんだよ。」

と楽しそうに答えてくれた。

「一言、教えてくれた良いのに！」

と、怒った口調の顔はとでもうれしそうだ。

こんなこともあった。ぼく達をお笑いライブに連れて行ってくれた時、父がさりげなく

「今日は面白くないね。」

と言つてがっかりさせる。しかし、これが父のびつくり計画である。その直後のぼくの動きが見えるのだろうか。大好きな芸人の出演で「ぎゃーっ！」と喜ぶ姿を想像しているのだろうか。父の目は、まるでいたずらをしている少年のようにうれしそうだ。そして、父の期待通りぼくは大喜びだった。

しているような答えは全く返ってきません。友達のことのような、けつこう悩んでいることでも、笑いにすり変わって返ってきます。解決になっているかという点、そうでもないのだけれど、笑っていると、「まっいいか。そんなこと悩まなくても。」という気分になるから不思議です。食事に行つて、注文したものと違うものがでてきたら、「違います。注文したものとかえて下さい。」とお店の人に言うのが普通です。でも、「これが、このお店のおすすめのかもしれないよ。食べてみよう。」と父は言います。手違いを怒るのではなく、おもしろがるうとするのです。父は「ちょっととした発想の転換だよ。これができる点、人生、楽しくなるよ。」と言います。きつと、そうだろうなあとも私 생각합니다。

「パパ、百点とつたよ。ホラッ。」

「えー、まるしかないの。パパ、バツも見たかったなあ。」

「今度ね。」

「パパ。いつも楽しいお返事ありがとう。」

昨年三月の旅行はびつくりの連続だった。春を感じる暖かい日差しの中、

「暖かい服装にしないさい。」

と言われたぼくは、

「今日は寒くないよね。」

と、弟に話しながら外出の準備をした。父の車が到着したのは空港だった。期待と不安のぼくの目に、札幌行き飛行機が映った。父がポケットから取り出した今度のびつくりは北海道旅行だ。

「やった！」

と大喜びのぼくと弟。そして、出発してから帰宅するまでの父の完ぺきな計画に、もう一度びつくりさせられた。ぼく達を喜ばせるたくさんのメニュー。父母への感謝を心いつぱい感じながら、初めてのスキーの夜をおそくまで楽しんだ。父は言う。ぼくや弟の喜ぶ顔を見るのが大好きだと。子供たちがびつくりしたり、喜んだりする姿を想像するのが楽しいと。時々、母をびつくりさせるが、これは想定外らしい。父は、二つのびつくりが終了した時、次のびつくりをスタートさせているようだ。

ぼくも、いつの日か、父母に感謝を表せるビッグなびつくりを計画したい。でも今は、父の次のびつくりが楽しみだ。父のポケットの中のびつくりを全部見たい。

お父さん、いつもびつくりをありがとう。

だいききないもうとへ

千葉県
千葉市立幸町第一小学校一年

たかやなぎゆうか

わたしが、ぐんまけんのおばあちゃんので、夕はんをたべているとき、いもうとからでんわが、かかつてきました。

「おねえちゃん、あいたいよ。」

わたしはそのこえをきいて、なみだがポロポロおちてきて、「みか、手じゅつ、うまくいってよかつたね。」

と、ことばにならないこえで、なんともいいました。

いもうとは、でんわをかけてくる三日まえに、しんぞうの手じゅつをしました。しんぞうに2つのあながあいていたからです。

びょういのせんせいは、あなのばしよによつては、手じゅつがつづけられなくなつたり、こわいがつべいしゅうをおこしてしまふかもしれないとはなしをしていました。

手じゅつがおわつてからも、いもうとは、ねつをだしたり、からだをうごかしてはいけないので、ベッドにせんしんをしばられ、大へんだつたそうです。おかあさんは、いもうとが入いんしてまい日、あさ早くから、よるおそくまで、つきそいをしていました。いもうとのびょうとは、12さいい下の子どもは、入れないので、わたしは、おとうさんやおかあさんやいもうとと、はなれるのは、かなしいけれど、ぐんまけんのおじいちゃん、おばあちゃんのおうちへきました。いもうとが入いんするまえは、わたしがともだちとやく

そくをして、こうえんにあそびに行くときも、

「みかもいく」

といつて、いつもわたしのまねばかりしてついできたり、ときどきケンカもしたけれど、はなればなれになつて、すぐさましくて、すぐにでもあいたくなりなりました。そんなときに、いもうとのでんわのこえをきいて、かなしいきもちから、うれしいきもちにかわりました。

いもうとのしんぞうには金ぞくが、うめてあります。それをしようめいするカードがあります。わたしは、このカードは、いもうとの、がんばつたあかしだとおもいます。

手じゅつでは、一つのあなは、とじることができたけれど、もう一つのあなは、ぜんぶふさぐことができなかつたそうです。でも、いもうとは、とてもげんきです。2か月は、うんどうができませんが、いつしよに、おりがみをおつたり、あやとりをしたり、本をよんだりすることができました。

いもうとの手じゅつので、かなしいおもひもしたけれど、かぞく四人でいられることがしあわせなことを、いもうとが、おしえてくれたとおもいます。

「みか、たいせつなことをおしえてくれてありがとう。みか、だいききだよ。あしたも本をよんであげるね。」

佳作
ぼくのひいじいちゃん栃木県
大田原市立野沢小学校一年

おおのそうし

ぼくがようちえんをそつぎようするころにひいじいちゃんがいいました。

「そうは、なにいろのランドセルがいいんだい？」

ぼくは「あおがいい。」とこたえました。おかあさんとかたろぐをみて、こんいろのランドセルにきめました。ひいじいちゃんが、しようがつこうにはいるおいわいに、かつてくれました。みんなとかたちがうランドセルです。ぼくは、きにいました。ぼくがひいじいちゃんに、「ありがとう。」という、ひいじいちゃんは「だいにしろよ。」といいました。

ひいじいちゃんがびょうきになつて、にゅういんしてしまいました。ぼくは、かなしくなりました。いつもいえにひいじいちゃんが、いなくなつてしまつたからです。ときどきおかあさんといもうととぼくで、びょういんへあいに

いきました。ひいじいちゃんはおうれしそうです。ぼくは、ひいじいちゃんのおむすをかいにいくかかりでした。

ひいじいちゃんは、「そうのにゆうがくしきにはたいいんしたいな。」といつていました。でも、ぼくのにゆうがくしきのひには、ひいじいちゃんのかえつてこられませんでした。

ぼくは、いちのさわしようがつこうににゆうがくしました。にゆうがくしきには、ひいじいちゃんがかつてくれたランドセルをしようていきました。びょういんにもランドセルをしようていきました。ひいじいちゃんは、「かつこいい。」といいました。ぼくとひいじいちゃんは、いつしよにしゃしんをとりました。ひいじいちゃんは、わらつていました。

そのあと、ひいじいちゃんがしんでしまいました。ぼくはもうひいじいちゃんにあえまません。ぼくはランドセルをだいにしようとおもいます。ひいじいちゃんありがとう。

おとうさんだいすき

鹿児島県
出水市立荘小学校一年

さごぐち ゆう

「おとうさん。」

なつやすみにわたしは、おとうさんにあうたにおかあさんたちといっしょにふくおかにいきました。

わたしのおとうさんは、おしごとのためにふくおかにたつたひとりです。

「ゆうちゃん、あいたかつたよ。」

とおとうさんはこたえてくれたけど、なんだかげんきがないのがわかりました。ちよつとしんばいになって、

「どうしたの。」

とわたしはきくと、

「ちよつと、あたまがいたいんだ。」

といっていました。わたしは、かわいそうなおとうさん、とおもいました。

でもつぎのひ、おとうさんは、あたまがいたくてねつがあるのにすいぞくかんにつれていつてくれました。わたしはおとうさんとしてをつなぎました。てをつないでたくさんのさかなたちをみてまわりました。イルカのショーのじかんにも、おとうさんのよこにすわりました。イルカのショーがはじまつてイルカがいろいろなことをみせてくれました。イルカをみながらよこにいるおとうさんのおもみしていました。おとうさんのからだのことがしんばいだつたけど、いつもこんなふうにおとうさんといっしょにいられたらうれいしいのになあとおもいました。これまでもおとうさんは、わたしたちのためにいっしょうけんめいはたら

いています。しごとでねるじかんもないくらいです。

そんなおとうさんのためにわたしは、ふくおかにいくまえに、たんじょうびプレゼントをじゅんびしていました。プレゼントは、おりがみでつくったケーキです。つくるのはとてもたいへんだったけど、やさしくてだいすきなおとうさんがよろこぶだろうとおもって、がんばってつくりました。プレゼントをわたしたとき、なんていつてよろこんでくれるかな、とどきどきしたきもちでした。

「おたんじょうび、おめでとう。」

いもうとといっしょにプレゼントをわたすと、わたしのおもったとおり、にこつとわらつて、

「ありがとう。すてきなケーキだね。」

といつてくれました。いつもやさしいおとうさん。いそがしくてもからだのちよつしがわるくてもあいてをしてくれるおとうさん。ふくおかからかえるひになると、だいすきなおとうさんとさよならするのがさみしくてたまりません。めかなみだがぼろぼろとこぼれてきます。「おとうさんもきつとおなじきもちかな。またくるからまつてね。」とこころにおもいながらかえりのでんしゃにのりました。そして、でんしゃのなかで、わたしは、「いつかかぞくみんなでいっしょにくらせるひがくる」といいなあ。「とおもいました。そのひがくるのをたのしみしています。それまで、からだをたいせつにしなから、おしごとをがんばつてね。わたしのだいすきなおとうさん。」

ぼくのおにいちゃん

兵庫県
神戸市立本庄小学校一年

まなべ としき

ぼくは、3にんきょうだいのすえつこで、4つうえにおね

えちゃん、2つうえにおにいちゃんがあります。ぼくのおにい

ちゃんは、とてもせがたかくていつもニコニコわらっています。

おうちのなかで、おもちやのボールでキャッチボールをして

まいにちママにおこられています。それでもおにいちゃんと

キャッチボールをしていると、とてもたのしいです。

「そんなことしたらほこりがたつ。いいかげんにしなさい。」

まいにちママはおこります。「なぜかとゆうとおにいちゃん

はぜんそくをもっているから。ほつさがでて、びょういんにいっ

てがつこうをやすすんでいるとき、すこくかわいそうです。そ

のときはニコニコしていません。でもぜんそくがなおるとま

たキャッチボールをしています。ときどきお兄ちゃんとケン

カもします。ぼくがないてママにいいにくと、ママはせつたい

「なんでおにいちゃんがおこったか、かんがえてみ。さきに

アンタがなにかしたんやろ。」

とゆわれます。おおあたりです。

このあいだ、からてのしあいがありました。こうべしのたい

かいです。がんばつてかちすすんで3いにはいりました。お

うちにかえつてみんなでビデオカメラをみました。いっばいの

ひがおうえんしてくれていたこえがはいつていました。そ

のなかで、いちばんおおきなこえでおうえんしてくれていた

のは、おにいちゃんでした。

「としきがんばれ、としきまけるな。」つて。

トロフィーをもらったこともうれしかったけど、おにいちゃん

のおうえんのこえはもつとうれしかったです。そしていっしょ

によるこんでくれたおにいちゃんがだいすきです。おにい

ちゃん、ありがとう。ぼくもおにいちゃんみたいなやさしい

ひとになりたいです。

佳作 大すきなおじいちゃん

秋田県
横手市立阿気小学校二年

つちだ たつや

ことしの夏、ぼくのおじいちゃんがゆういんしました。ぼくは、とてもさびしくなりました。なぜかというと、ぼくは毎日おじいちゃんとねているからです。おじいちゃんとねると、あつたかくてもちがいいです。足がつかなくなる、ぼくの足をはさんであたためてくれます。

おじいちゃんはとてもやさしくて大すきです。

おじいちゃんにゆういんしているびょういんに見まいに行きました。おとうとと行くと、おとうとはすぐに

「ジュースのみたい。」

と言つて、さわぎます。すると、おじいちゃんは、

「ほれ。」

といつて、ぼくとおとうとにお金をくれて、じどうはんはいきに行つてジュースをかつてくれます。おじいちゃんは、おなががいたくてまだすきなものがたべられないのでなんだかかわいそうでした。でも、おじいちゃんはずつものようにやさしくて、顔を見たらうれしくなりました。

ぼくは、おじいちゃんのない間、おうちの手つたいをがんばりました。お父さんといつしよにげんかんそうじをしました。

それから、おばあちゃんといつしよにおじいちゃんのおとんでねました。おじいちゃんはいないけどおじいちゃんのおとんはなんだか気もちよくねわれました。

おじいちゃんはおほん前にたいいんしました。かえつてきたおじいちゃんは、

「どれ、きてみれ。」

と言つて、ぼくをだいですわりました。

「ほう、おもでぐなつたこと。」

と言つてニコニコしていました。ぼくも、うれしくてニコニコしました。

そのよる、かぞくみんなそろつてごはんをたべました。にぎやかになつてとても楽しくておいしかったです。

そのあと、ぼくはおじいちゃんにおんぶされました。ぼくは、おじいちゃんのおんぶが大すきです。おもくなつたぼくを、しっかりとおんぶしてくれました。

そしてまた、ぼくはおじいちゃんといつしよにねむりました。やつぱりおじいちゃんのおとんはあつたかくてよかつたです。

おじいちゃん、よわ虫のぼくのそばにいてくれてありがとう。

佳作

おとうさんいつもありがとう

埼玉県

さいたま市立島小学校二年

きみわだ みさき

わたしのおとうさんはしゅつちようが多くて、いえないないときがほとんどです。だからあまりお休みがありません。友だちは、土曜日と日曜日におとうさんとあそぶことができるのでうらやましくなります。

このあいだおとうさんのしごとがお休みのときに、サマーランドにつれて行つてくれました。高いなみのであるプールもおとうさんといつしよならあんしんして、楽しめました。もつと、おとうさんといつしよにあそべたらいいのになと思います。

わたしのおとうさんのおしごとは、おもたくせいみつなきかいははこんで、こうじようにとりつけることです。せいみつなきかいなので、ほこりが入らないように気をつけなければいけません。だから、うちゅうふくのようなふくをきてしごとをしています。はこぶきかいはおもいので、すこしでもまちがえるときけんです。わたしは、おとうさんが大けがをしないようにしてほしいです。

おとうさんがしゅつちよう中のときの二ばんの楽しみは、おとうさんからのでんわです。

「今日はなにをしたの。」

と色いろな話を聞いたりしてくれます。おとうさんのこえを聞くと、うれしいようなさみしいような気分です。早く会いたくてしかたがありません。長いしゅつちようからいえにかえつてくると、おとうさんはすぐに、わたしをだっこしてもち上げてくれます。おとうさんは、ニコニコしながら「みさき、おもたくなつたなあ。」

と、うれしそうに言います。それから、いつしよにおふろに入り、おもちゃであそんだりします。おふろからあがると、もうわたしもおとうさんの手も、ふやけてしまっています。おとうさんといつしよだと、おもしろいので時間をわすれてしまいます。

かぜをひいてもかぞくのためにおしごを休まないおとうさん。いつもやさしくだっこしてくれるおとうさん。おとうさんがびょうきだとなきたいようなつらいきもちになるので、おしごとがお休みのときは、ゆつくり休んで、また色いろなところに行つてほしいです。

おとうさん、いつもありがとう。

わたしのまま

徳島県
美馬市立江原南小学校 三年

遠藤 彩香

「あー、ねすごしたあ。」
と、あわてて朝おきる。

「あやか、起きなさいよ。」
と、わたしを起す。もちろん、わたしもねぼすけ。

「早く、ごはんを食べて。きがえて。」
と、つきつきと大声がとんでくる。ままはしごとに行くのでひつし。わたしもひつし。なんかたいている。この間、スパーでUFOキヤッチャーのゲームをした。くじをつかまえてしようひんがもらえるやつ。わたしは一回しかさせてもらえなかったのに、ままは十回くらいはしていた。そして、一回で五まいくらいくじをつかまえると、

「よっしゃー。」
と、ガッツポーズをきめた。よこに、わたしのともだちがいて、

「すごーい。」
と、言ってくれるけど、はずかしかった。

だつてまま、わたしよりうれしそうにしてるんだもん。

ままは、かがみの前にわたしをよんで、わたしのうしろに立って自分のオリジナル曲に合わせて、へんなおどりをさせる。おかしくて体がヒヨロヒヨロになる。

ままは、時々
「だつこしてえー。」
と、あまえる。おとななのに子どもみたい。
ままは、テレビを見て感動すると、

「あーっ、あーっ。」
と、なき

「ティッシュー、とつてえー。」
と、へんな声でいう。人のことなのに、そんなになけるなんてふしぎ。

ままは、自分がおちこむと

「ママのいい所、10こいうて。」と、いうと

「ままは、あやかのいい所、20こは言える。」

と、じしんあるようにいうので、がんばって考えると、ままはよろこぶ。わたしは考えた。ままは、わたしにいつばいちゅうもんするけど、わたしはままほどちゅうもんしない。

ままは、
「あやかの事は、おなかの中にいる時からだいたい分かるんよ。」
と、いう。

わたしが元気がない時は、そつとよつてきてひぎにのせてギューとする。ママ、いたいつて思うけど、なんか気持ちいい。ままつてなんか分らないけどすこい。

しごとでよる、家にいない時もあるけど、いつもそばにいる気がする。あんしんする。

ままは、
「あやかー。」
と、よくおこるけど、いつばいわたしのいい所をいつてくれる。ありがとうまま。へんなままだけど、わたしはままがだいすきです。

佳作
ありがとね、なるちゃん

埼玉県
さいたま市立上小小学校 三年

井上 大誠

ぼくには三才になったばかりの弟がいて名前は「なるみ」といいます。弟は小さくて丸くてさわるととても気持ちいいです。でもせいはいたずらでこであばれんぼうです。そして、おせつかいでおこりんぼです。おまけに自分で遊んだものもかたづけません。そのくせ、ぼくがかたづけをしないと弟は「たいくんかたづけなさい。」
と、いばつて母に言いつけに行きます。

こんなにはづれているくせに、まだ時々おっぱいを飲んでいいます。こんな事をする弟ですが、やさしい所もあります。

ぼくはよく母におこられます。その時に、弟は必ずぼくの味方になつてくれて、母をぶちに行きます。ぼくが悪い事をしたからおこられている時も母に向かつて

「たいくんにあやまりなさい。」
と言つてくれます。ぼくは心の中で

「本当はちがうのになあ。」
と、思いながらも

「なるちゃん助かつたよ。」
と、いう気持ちになります。

それから、弟はぼくが何かしていると、

「たいくん、かっこいいね。」
とか

「たいくん、えらいね。」
といつもほめてくれます。そんな時すくうれしいです。ただ、

「えらいね。」と弟にいわれるのは少しバカにされている気分になるけれど……。

ぼくと弟がけんかをしている時に母が、

「なるみはたい君の弟になりたくてこの家に生まれて来たんだよ。なるみはたい君が大好きなんだよ。」
と、ぼくに言います。そう言えばよく弟は、

「たいくん大好き。」
と言つてくれます。ぼくは…あまり弟に言っていないかもしれ

ません。
「たいくん大好き。」

「ただぼくだつて、いつもなるちゃんのことをこう思っているんだよ。」

「いつもありがとね。大好きだよ、なるちゃん。これからも仲良くしようね。」

生きていてくれてありがとう

京都府

ノートルダム学院小学校三年

清水 堯仁

「起きや。お兄ちゃん。しつかりしてや。」

お母さんの車の中で眠ってしまっていたぼくは、知らないおじさんにたたきおこされた。

「ピーポー。ピーポー」

救急車のサイレンが聞こえた。熱を出していた弟がスパーの中であおられてしまったらしい。弟は、お母さんにだかれていたが、白目をむいてガクンガクンとけいれんしていた。お母さんとぼくは救急車に乗せられた。初めて乗った救急車だけどうれしくなかった。

病院の救急室に運ばれて、ぼくたちは外でまたされた。十分たつても弟の声は聞こえない。もう一人先生が走って入っていた。

「まーくん。だいじょうぶだよね。」

とぼくがお母さんに聞いたら、お母さんは何も答えずにぼくをだきしめた。

弟が生まれた時、ぼくはとでもうれしかった。おむつもかえたり、ミルクもあげた。ふわふわのほっぺにいっぱいチューをした。いつもいっしょに遊んだし、けんかもしたけどすぐ仲直りした。もうぼくのことを

「たかちゃん。」

とよぶ声が聞けなくなったらどうしようかととてもつらくなった。

とても長い時間がたった。

「えーん」

弟の声が聞こえた。ぼくは

「生きていてくれてありがとう。」

と思った。お医者さんと弟に何度もありがとうと叫びかけた。

次の日に弟は退院できた。おむかえに行くとき弟はコアラのマーチを一人で食べていた。

「あー。」

ぼくは声を出したが、ゆるしてあげた。とてもがんばったんだから今日はゆるしてあげようと思った。

あれから熱を出しても一度もけいれんをおこすことはない。いっしょしゃべるか、歌っていてもうるさい弟だけど、生きているだけでありがたいと思ったあの日のことを忘れない。とてもかわいい弟だ。来年は、一年生になるからいっしょに小学校に行こうね。

佳作

七夕が三回の家族

青森県

青森市立浦町小学校三年

太原 杏歌

私の父と母は、広島市でお店を三店開いています。広島市に父の家があるからです。お客さんにお酒やお料理を出すお店なので、父と母は、夜おそくまで一生けんめいはたっています。だから、私は三才のころから、母の家がある青森市で、祖母と母の兄と私の三人でくらしています。

「さみしくないの？」

と、クラスのみんなからよく聞かれます。小さいころは、さみしくてよく泣いていました。ほかの人がお父さんお母さんと仲良く歩いていると、うらやましくて会いたくなってしまう。みんなも、お父さんお母さんとはなれてくらしたら、きつとさみしいと思います。

父と母は、お店がふえてとてもいそがしくなったのにもかかわらず、さんかん日などの何かがあると、交代で青森へ帰ってきてくれます。そして、いつも、

「はなれていても、杏歌は宝物だから。」

と言ってくれます。だから、私はその分勉強をがんばってお返ししようと思っています。

私が広島に長くいられるのは、春・夏・冬休みの三回です。一年にたった三回だけです。だから、私が五才のときに、

「七夕が三回だね。」

と言ったことがあります。すると、母が、

「夜、いつもお月さまを見て、杏歌も同じお月さまを見ている

のかなあと思うと泣きそうになる。」

と、えがおで言ってくれてことがあって、すぐうれしかったのを覚えていて。だから、私も小さいころからお月さまを毎日見るようになりました。お月さまを見ると、どんなにどんなにどんなにはなれていても、心はいっしょだと思えます。

そして、私のことをずっと見ていてくれる祖母やおじさんも大好きです。祖母にはずっと長生きしてほしいと思っています。

私の家は、ほかの家とはちがうけれど、私はとつても幸せです。お父さん、お母さん、おばあちゃん、おじさんがいるし、友だちもたくさんいるので、いつもわらわらしています。それに、もう三年生だから、さみしくないと、泣かないです。

今年の夏休みは、お父さんとお母さんのお店の手伝いをします。まだ子どもなので、お皿あらいくらいしかできないけれど、生けんめいがんばって、少しでも役に立ちたいです。

私は、広島から青森に帰るときは、いつも後ろを見ないようになっています。見るとさみしくなるからです。お母さんもうっしよだと言っていました。でも、今年はちゃんと後ろを見て、「ありがとう。」

つて言おうと思います。

いつだって、私のことを考えていてくれる家族が、私の世界の宝物です。

「そんなに忙しかったんだね」

北海道
北海道教育大学附属札幌小学校四年 門田 有紀乃

「ポッポコッポッピー〜」真夜中にケータイがなった。学校からのメールの音だ。いつもは絶対に起きないお母さんが珍しく起き上がって「ゆつひゃん。ひょんで〜(ゆつちゃん、読んで)。」と寝ほけまなこで私にケータイを渡した。内容は、なんと学校で水もれが発生して明日は臨時休校というものだった！大変だ！でも、お母さんは「あらあら。」と言ってまたすぐ寝てしまった。いつもそうだ。私のはみがきをしている間にグーグーグー、私はまだ日記を書いているのにグーグーグー、私が小さいときは毎晩読み聞かせを何十冊もしてくれていたって言うけど本当かなと思う。最近の本を読みながら寝てしまっていて、仕方なく私がメガネをはずしてあげて本をかたづけする事だつてよくある。そして、毎日私が部屋で電気を消している。ほんとにもう！お母さんったら。

次の日、私が起きたらお母さんはお洗たくをしていた。それと、私の漢検の問題作りとPTAのワープロと朝ごはんの用意。何時に起きたの？私は毎朝なかなか起きられなくてポーツとしていたので時間がなくなつて大急ぎでご飯を食べて全速力でJRの駅まで走る。だからお母さんが朝に何をしているか見ている時間はなかったけど、ずいぶん早起きしてるみたいだ。それからお母さんはまたお洗たくをしてペランダに干して、それをしながら朝ご飯の片付けとか家中のおそうじをし

た。ついでに、私の勉強をみたり、ピアノの練習をサボつてたらにらみに来たり、すごくよく動く。時々「あー座りたい。」と言うので「座れば？」と言つたら、「まだやることあるから。」とまた動き出す。へんなの。

お昼ごはんを食べて少ししたら今度は洗たく物をペランダから取ってきてたんだり、アイロンをかけたたりして「暑い暑い。」と言っている。「休めば？」と言つたら、「まだやることあるから。」つてもう一回言つて今度は「夜、何食べたい？」と聞いて晩ご飯の用意を始めた。ついでに時々パソコンもしている。気がついたら洗たく物はみんなしまつてあつていつもの家の中になつていた。「いつもそんなに洗たくとかおそうじするの？」と聞いたら「そう、有紀乃がいない間にね。」と、言っていた。毎日そんなにいいそがしいなら私より先に寝てしまふのもわかる。毎日家にいるお母さんがこんなにいいそがしいとは私は何も知らなかった。そんなことはなんにも考えたことがなかった。わかつてよかった。お母さんは本が好きだから、寝る前の本を読む時間がお母さんの休み時間なのかもしれない。でも、疲れていたせいで寝てしまうのかもしれない。もう文句を言わないで電気を消してあげよう。メガネもつてあげよう。おやすみ、お母さん。毎日ありがとう。でも、お母さんの「やること」はいつ終わるんだろう。

佳作
ありがとう、生まれてくれて東京都
早稲田実業学校初等部四年

山口 庸可

むねがドキンとした。

二年生がもうすぐ終わる三月の晴れた日、一時間目の音楽の後、担任の岩城先生がわたしを待ちかまえていた。

「赤ちゃんが生まれそうだから帰るじゅんびして！」

校庭には、お友達のお母さんがおむかえに来てくれた。バレエやピアノの発表会の前でも、囲碁の対局の時でも、こんなにドキドキしたことはなかった。

その日、おじいちゃんおばあちゃんと父は家の用事で愛知に行っていた。母が今、待っているのはわたしだ。わたしは今、母が頼れる相手はいないんだ。

母はやつぱりわたしを待っていた。わたしが家に着くのを待つて、それから一緒に病院へ向かった。

「けいさんぶで七分おき！そく分べん室！」

かんごしさんたちの急ぎぶりで、赤ちゃんが生まれるのが近いことをさつた。そして、母の表情と、母が握っているわたしの手の痛さで。

「オギヤーオギヤーオギヤー」

赤ちゃんは本当に「オギヤー」と泣く。病院に入つてから一時間足らずだった。

その子の人生が始まると同時に、わたしの人生もがらりと変わった。今思うとその泣き声は、それを知らせる鐘のようでもあった。

わたしは、お姉ちゃんになったのだ。

今までは、父も母も食べ物もひとりじめだった。親せきの中でもアイドルだった。それが二氣に全て妹へと移つてしまった。

でも、それは、まんざら悪くもない。わたしは、お姉ちゃんだからがまんをする。ゆるする。ゆるす。

「お姉ちゃん、えらいね。」

と、みんながほめてくれる。

「お姉ちゃん、は、妹に名前もつけた。」

「愛を結ぶ、と書いて、あゆう。」

本当に、その通りの妹に育つてくれている。

父と母がけんかすると、二人の手をつながせようとす。わたしが母にしかられていると、わたしの頭をなでて「いいいいいこ」と言つたりする。

何の汚れにもごりもない笑顔で、いつも家族中をいやしてくる。寝顔もかわいくて、見ると二日のいやなことが全部すうーつと消えていく。

愛を結ぶ子、わたしの妹、あゆう、この家に、わたしの妹に、生まれてきてくれて本当にありがとう。いつも元気に笑つてくれてありがとう。いつも家族を楽しませていやしてくれてありがとう。

いつか、この作文を、自分の目で読んでね、あゆう。本当にありがとう。

佳作

ありがとうより、もつとありがとう

福岡県
明治学園小学校 四年

天埜 優奈

私の父は単身赴任で四国の高松にいます。でも、幼稚園や小学校の行事、家族のイベントには必ず帰ってきてくれ、私にさみしさを感じさせないように、仕事で忙しい中、いつもかけつけてくれます。

そんな父の体の変化に気づいたのは、私が八歳の頃でした。会うと必ず、日本の歴史や偉人の話などをわかりやすく話してくれてた父が、あまりしゃべらなくなり、すぐに疲れるようになりました。そんな日が続く、しばらくすると、父の顔を見ることが少なくなりました。

私、知りませんでした。小学校に入学した頃から、父が重い肝臓の病気にかかっていたことを。

私、気付きませんでした。

特別な注射と強い薬の副作用で、体だけでなく、精神にまでダメージを受け、入院をくり返していた事を。

病気を私に内緒にしておこうと言いつ出したのは父だった、という事を母から聞きました。それは、小学校に入学したばかりの、夢や希望に満ちあふれ、父を信じ母を信じ頑張ってきている私に、余計な心配で悲しませたくない、強い父の姿しか知らない娘に弱い姿を見せてしまうと娘までが自信のない

佳作

「ばあちゃんいつもありがとう」

山形県
新庄市立日新小学校 四年

本間 貴大

ぼくが三年生の秋の終わりのころでした。

「この家にいられなくなった。別のところへ引こすから。」とつ然お父さんから言われた、あのとのおどろきは今までわすれられません。

じいちゃんの仕事があまくいかなくて、借りたお金を返せないから、ぼくのおうちが売りに出されるというのです。話を聞いているうちに、ぼくの目からなみだがぼろぼろあふれてきました。頭にうかんだことを聞いてみました。

「神社どうするの。」

おうちのわきに神社があつて、ぼくはいつもその辺で自転車乗りをしたり遊んだりしていました。夏には、大好きなお祭りの前のおはやし練習も、神社の前でした。町内みんなのものです。おはやしですが、何かあるとじいちゃんがおそなえ物を用意して、おがむときもぼくを連れていってくれていたのです。だから、お父さんの次はぼくが神社を守るんだと思つていたからです。

もう一つ、心配なことがあります。それは引こす所はせまくて、じいちゃん、ばあちゃんがいつしよに行けないということです。いつも仕事で帰りのおせいお父さん、お母さんに代わつて、ぼくたち三人姉弟のめんどうをみて、大きくしてくれたのはばあちゃんです。ぼくは、ばあちゃんにおんぶされるのが大好きでした。二人で「日本昔ばなし」のビデオを見るのが、大好きでした。ぼくの大好きな大相撲の対戦アルバムを、場

不安な日々を送らなければならなくなる、その方がつらいと言つたそうです。

私は泣きました。私の事をこんなにも大切に思つてくれる父へ、感謝の涙を流しました。そして、単身赴任で高松だと思つていた父が、まさか入院していたなんて、小指の先ほども疑わずにいられたのは、母が、いつでも、どんな時でも笑顔をやさず、これまで通り、何も変わらずに、仕事・子育て・家事・看病と頑張つてくれていたからだと思つた。ちよつとした事でふくれたり、何でもない事で文句を言つたりした自分を思い出すと、くやしくて、また涙が出ました。

今でも父の病気は完治していませんが、心配するほどの悪いウイルスはいなくなり、少しずつ良くなってきています。

私を大切に思い、自分の病気をかくして私に強さを教えてくれた父と、いつもニコニコ笑顔で私を安心させてくれる優しい母を、ほこりに思います。そして、そんな両親の子供である事がうれしくて、

「お父さん」

「お母さん」

ありがとう、ううん、

ありがとうより、もつとありがとう。

所ごとに作つてくれました。小さいころからやつたトランプ。チラシのうらにメモした勝負の数を数えてみたら、八百七十回をこえていました。最初は負けるとかやしくて、よく泣いてあはれたけれど、コツを覚えて強くなったし、負けても泣いたりいじけたりしなくなりました。

「ばあちゃん、今までありがとう。」

考えているとおなかのあたりが、じわじわあつたかくなつてきて、また涙が出てきました。

あれから、半年になります。結局、ぼくのおうちは、そば屋さんになりました。じいちゃん、ばあちゃん、別のアパートにくらしています。

でも、学校から帰つてくると、ばあちゃん、ぼくのかきを開けて、おやつを用意して待つていてくれます。前と同じように、お姉ちゃんたちの部活やピアノの送りむかえをして、ぼくも元気に遊びに出かけます。夕飯も作つてくれます。みんな、ばあちゃん、ごつおが大好きです。

ばあちゃん、いつもありがとう。ばあちゃんがいると、家族みんな安心です。前は当たり前だと思つて気づかなかつたけど、ぼく分かるようになったよ。

ぼくの家族に大きな声で言いたい。

「別々にいても家族だよ。またいつしよにくらせるように、ぼくがんばるからね。」

大好きなお母さん

愛媛県
西条市立周布小学校四年

首藤 央樹

ほくのお母さんは、きびしいけどやさしいところがありません。ほくがじやらけたり、約束を守らなかつた時や、人にいじわるをした時は、とてもきびしくしんけんにおこります。そんな時ほくはなみだが出て、もうぜったいしてはいけないと思います。でも、ほくがつらくて泣いている時やこまっている時には、同じ目線になってほくの話をよく聞いてなぐさめてくれます。するとほくはふしぎとゆう気ができて、またがんばろうと思います。

ほくは、お母さんの体で好きな所が二つあります。一つ目は、にのうです。マシユマロのようにやわらかく、さわりこちは百点まん点です。リビングでいっしょにテレビを見ていても、ほくはいつの間にかお母さんののうでをさわっています。するとお母さんは、

「さわられん。太くなつてしまふやろ。」

と笑いながら少しおこっています。ほくが、ニヒツと笑つてごまかすと、お母さんも笑いだして、二人で大笑いをします。

二つ目は、おなかです。お母さんのおなかはポニヨポニヨしていて、まるで風船のようです。ほくが、

「どうしてお母さんのおなかはそんなに大きいの？」

と聞くと、お母さんは、

「このおなかで三人がおおきくなつたんよ。特にヒロは一番大きかつたんよ。」

とおなかをたたきながら答えてくれます。そんなお母さんはまるでタヌキのようだけど、ほくは、大好きです。

ほくのお母さんはお仕事をしています。そのため、ほくが学校から帰ってもいないのがとてもさびしいです。だから時々お母さんのけいたい電話に電話をして、お母さんの声を聞きます。すると、安心して心が落ち着き、宿題をすることが出来ます。お母さんが仕事から帰つてくると、お母さんのもとかけつけて、にのうでやおなかをさわつて、ほくのお母さんだとかくにんをします。

お母さんは、仕事から帰つてきてから、ばんこはんを作りながら、宿題を見てくれたり、ほくたち三人のれんらくプリントをかくにんしてくれれます。ほくたちがねてからも、せんたくをしたり、明日の用意をしています。でも、朝は早く起きて、ほくたちよりずっと元気です。ほくはこんなお母さんの子どもでよかつたと思います。いつもほくたちのために働いてくれたり、家事をしてくれるので、心からありがたく思います。

最後にほくのお願いは、これからもお母さんにはダイエツトなどをしないでマシユマロのようなにのうでと、風船のようなおなかでいてほしいと思っています。そして、いつまでも元気なお母さんでいてほしいです。

佳作

おばあちゃんいつもありがとう

神奈川県
湯河原町立吉浜小学校五年

北川 真衣

私のおばあちゃんは、とても声大きい。

「まーまー」といつも私をよびます。多分、近所の人はまたまいちゃんよばれているなあーと思つているだろう。たまにうるさいなあーと思うこともあります。でも私は、そんなおばあちゃんが大好きです。

私はおばあちゃんといろいろなことを一緒にやります。ホットケーキを作つたり、かき氷を作つたり買ひものに行つたりもします。家族のみんなに内緒で温泉に行つたり、二人でスパゲッティーを食べに行つたり、ほかにもいろいろあります。

おばあちゃんは青森の人でなまりがあり、しゃべるとおもしろいです。青森からおばあちゃんの妹が遊びに来た時は、なにをしゃべつてるかわからないけどなんだか、こつちまで、なまりがうつつてしまひそうになるんです。私の友達にも聞かせてあげたいと思うことがよくあります。おじいちゃん、仕事で長いお休みがとれると青森に二人で行つてしまいます。そうするとうちの中がすくく静かです。

くなります。いつも大きな声でしゃべつてるおばあちゃんがないとこんなにも家の中が変わるんだなあーと思います。私がおじいさんの家にしばらくとまりに行つたことがあります。週間家になかつた時があつてかえつてきたらさみしかったよといわれて、そういえば私もそうだったと思いました。ということはおもおしゃべりで声が大きいのかな。

これからまだ、いっぱいおばあちゃんとやりたいことがあります。たとえばご飯を一緒に作つたり、旅行に行つたり、お花を育てたりもしたいです。おばあちゃんは、車のめんきょしようをもっています。だから、どこかに行く時はいつも歩いたり、バスは電車で行きます。暑い日はかえつてくるつすいあせをかいています。それを見ると私が早く大人になつて車のめんきょしようをとつてあばあちゃんをのせてあげたいと思います。

いつも私のことを見てくれていろいろなことをしてくれらるおばあちゃん。ずうつとながいきしてほしいし、ありがとうという気持ちでいっぱいです。

「ありがとう」

埼玉県
川越市立古谷小学校五年

関根 茉莉香

「まりかちゃんを怒っちゃだめ。ままは悪い子。まりかちゃんにごめんなさいして。」

私が怒られていると、いつも弟がとんできて私の事をかばってくれます。「えるちゃんにはかなわないね。まりか、きちんとお片付けしなさいよ。」と、今までおにみたくに怒っていた母も、ちよとあきれた顔をして、行つてしまいます。

私は6年間ひとりっ子でした。お友達にはみんな兄妹がいるのに、どうして私にはいないんだろうと思つて、サンタクロースをお願いしたり、神様をお願いしたりしました。だから、母から「まりちゃん、もうすぐお姉ちゃんになるのよ。」と言われた時はとてもうれしくて、まず、母と父と神様とサンタクロースに「ありがとう」と言いました。でも、そのころは、赤ちゃんが十ヶ月もお腹の中ですこすななんて知らなくて、どうして早く赤ちゃんが産まれてこないのか、本当は父と母がうそをついているのではないかと思つていました。

四年前の四月十四日のまだ太陽もでていない朝早く、母が、は水、したので、あわてて、父と母と私は3人で病院に行きました。苦しそうな母に手紙をわたすと、母は私に「まりちゃんありがとう。」と何回も言ってくれました。それから何時間も経つて、やっと弟が生まれ、かんこしさんに許可をもらつて母のそばに行くと、小さなかわいい赤ちゃんが横にねむっています。父は母に何回も「ありがとう。」と

いついたので、私も父のまねをして、母に「ありがとう。」

をたくさん言いました。後で父に、なぜ、「ありがとう。」

を言ったのか聞いてみると、お腹の中で長い間赤ちゃんを育てるといふ事の大変さ、大きなお腹で家事をすることの大変さ、歩くだけでも大変な事、それから何よりも、赤ちゃんを産むのがどんなに痛くて苦しい事なのかを話してくれました。次の日、さうそく母に父から聞いた話をして、もう一度「ありがとう。」と言うと、母は少しだけ泣いて、「ありがとう。」と言つてぎゅつとだっこしてくれました。その時の事を思い出すと、少しむねがきゅつとします。

母と弟が退院した後はお仕事で遅い父にかわつて、私が母と二緒に弟をおふろに入れたり、ミルクをあげたり、おむつをかえたりしました。私にとっては全部楽しい事だったので、今でも父と母は、私に「まりちゃんがいてくれたから、とても助かったよ。本当にありがとう。」と言つてくれるので、それを聞くたびに、とてもうれしくなります。

赤ちゃんだった弟も、今は四才です。ケンカもするし、にくらしい事もあるけど、今でも弟をおふろに入れるのは私の大事な役目で、ねる時いつも一緒です。こんなにかわいい弟を産んでくれた母、私達のために生けん命お仕事をしている父、私の家に産まれてくれた弟に、沢山「ありがとう。」と言いたいです。

佳作

「ありがとうが言えなくて」

埼玉県
行田市立東小学校五年

岡安 琴音

「おかえり!」

と、大きな声でむかえてくれるおばあちゃん。雨風の強い日も、とてもあつい夏の日も、私達の学校の帰り道いつもきまつた所で帰りをまつていてくれます。

「安全に帰れる事が大事だから。」

と、もう何年もつづけていてくれるのです。本当はとてもありがたく思っているけど、少しうれしくさいいとはずかしさで、なかなか

「いつもありがとう。」

とは言えないでいます。農作業の途中で来たおばあちゃんに「もつとちゃんとした服で来てよ!」

と、言ってしまった事もあります。夏休み前は暑い日がつづき、大きな麦わらぼうしをかぶつて自転車にのり汗をいっぱいかいて来てくれたのに、あたり前だと思つてしまつて、自転車を押して歩つてくるおばあちゃんをいないかのようになつて帰つてしまった事もありました。小学生がぎせいになる悲しい事件があり、私達を安全に帰れるよう、待つていてくれることを、安全に帰れている毎日の中でありがたさを忘れてしまつています。

ある日の事、学校の行事の変更で帰りの時間がかかる事をおばあちゃんに伝えないう事がありました。その事を忘れていた私はいつもと同じように、お友達と話しながら帰り、おばあちゃんの待つていてくれるあの道へつくと、きつと

一時間以上まつていてくれたのでしよう、道のすみに座つて

いるおばあちゃんが見えました。私達を見つけると

「よつこいしょ。」

と、声が聞こえてくるようなスピードで立ち

「おかえり!」

と、いつもと同じように大きな声で声をかけてくれました。私は時間を伝えていなかった事にすく気づきましたが、おばあちゃんは、その事をちつともせめる事なく

「今日はおそかったんだね。」

と、やさしく言ってくれました。もし私だったら「ずつとまつてたんだよ!時間がかわつたのなら、ちゃんと教えてよ!」

と、言つてしまつたにちがひありません。この一時間の間にできる事もいっぱいあつただろうに、ずつとまつていてくれました。そんな日があつても、私は

「ごめんねまたせちやたね。今日もありがとう。」

とは言えませんでした。

「おばあちゃん、本当はいつも待つていてくれる事本当はとてもうれしく思っているんだよ。いつもありがとう。これからもううれしくお願いします。」

今度は大きな声でこの気持ち伝えようと思ひます。大好きなおばあちゃん。

佳作 母さん、頑張れ

青森県
八戸市立吹上小学校六年

廣瀬蓮

六月。母さんのお腹が出てきた。ぼくが、「メタボにでもなったの。」
と言うと、

「失礼ね。実は赤ちゃんがいるの。」
と、母さんがいきなり言ってきた。ぼくは、びつくりして、信じられなかった。だって、母さんはもう、三十九才だ。兄さん達は、十八才と、十七才だし、ぼくだって、もう十二才だ。だから、何度も聞き返し、本当だと分かるとうれしくしようがない。

「まだ、あなたと父さんしか知らないの。他の人には言わないでよ。」

と口止めされたが、次の日、親友と先生に教えてしまった。

七月。ぼくは、母さんに質問しまくった。

「いつ、生まれるの。」「十一月十二日ぐらいよ。」「男、女、どっち。」「まだ、分からないよ。」などなど。どちらにしろ、うれしかった。自分の下に、弟か妹ができるんだから。

夏休みになると、母さんはどこから見ても、妊婦体型になった。足がつることがあつて、ぼくと父さんが、交代でもんであげた。

七月二十五日の夜中、震度六の地震がきた。あわてて起きると、父さんが「ドアを開ける。」と言った。ぼくが、開けると、やつと地震がおさまった。床に、物が散乱していた。「すごい状態だろ。母さん守るので精いっぱいだったからな。」

と父さんが言った。兄ちゃん二人も起きてきて、「母さん大じょうぶか。」と声をかけた。家族みんなが、母さんを心配していた。その後、母さんを寝かせて、みんなで片付けた。

そして、九月。母さんのおなかは、前にもつこりてつぱり、歩くのが大変そうだ。でも、年の割には順調らしい。ぼくは、毎日、母さんのおなかで楽しんでる。

「蓮、来て、来て。ここ触ってみて。」

母さんが言ってくる。わき腹を触ると、ドンドンと押してくる。母さんが、

「すごいでしょう。足でけつてるんだよ。あんたもこうだったよ。」

と思い出して言う。ぼくは、「えー、うそだ。」と思ったり、「元気に育ってるんだ。」と喜んだりしている。

ぼくは、十一月を待っている。もう、男か女か分かるらしいが、母さんは、「知りたくない。」と言っている。ぼくは、それもいいなと思う。家族みんなで、新しい命の誕生を待っているんだけど、ぼくにはさらに、うれしいわけがある。ぼくの誕生日が十一月で、赤ちゃんの予定日も十一月だからだ。同じ月だけでもうれしいけど、同じ日だったら奇跡だ。

ともかく、母さんに頑張ってもらいたい。ぼくは、今まで育ててもらって感謝している分、赤ちゃんを大切にしようと思っている。そして、生まれたら、母さんに、「ぼく達の弟妹を生んでくれてありがとう。」と絶対言う。

佳作 「すごいおじいちゃん」

広島県
世羅町立東小学校六年

近藤 大介

おじいちゃんは、いろんな事を知っていて、何でも教えてくれます。ぼくは、物を作るのが好きで、作っていたらいろんなアドバイスをしてくれます。

実は、ぼくのおじいちゃんは大工さんです。いろんな人の家をたくさん建てたそうです。山の木のことは、とてもよくわしくて、ぼくが質問したことは何でも答えてくれます。

おじいちゃんの最後の大きな大工の仕事はぼくの家でした。自分で図面を書いて、山へ行つて、ひいおじいちゃんや、その前のおじいちゃんが植えて手入れしておいてくれた木を、「この木は家の、どの部分に使える。」と考えながら、たくさん木を切り出してきたそうです。そして、その木を一年かけて天日でかわかして、次は製材所を持って行って製材します。木の木目とか、くせを考えながらするそうです。ぼくも木の皮をむぐの手伝いました。

ぼくが小学校二年の春、古い家をこわして、新しい家を基礎から作るのを見ってきました。ぼくたちも、できる手伝いはしました。夏に、家を建てる「たちまい」というのがありました。三日間かかって柱をたて、ぼくもはしこで二階の部分にまであがつて、おもちゃ、お菓子を投げました。友達がたくさん拾いに来てくれて、うれしかったです。それから、昔ながらの土壁にして、またしつかり日にちを

かけて、かわかしていきます。土壁は呼吸をするので、日本のような湿気の多い季節にはとてもよいそうです。壁の板には、と料をぬります。これも少しだけ手伝わせてもらいました。

ひとつひとつ、完成していくようすを見ながら、おじいちゃんは本当にすごいなと思いました。げた箱や、机や、いすまで作ってくれました。

おじいちゃんは、

「ご先祖様が、わしらのために木を植え、手入れして残してくれていたおかげで、こうして家を建てることもできました。わしらは今度、子供や孫、そのまた孫達のために山の手入れをしていかなといけん。」
と言っていました。

ぼくは、そうなんだ、昔の時代からずっと続いてきているんだと思うと、すごいことだと思いました。ちなみに前の古い家も百年近く前に建てられた家でした。

ぼくの家は、おじいちゃんを作ったひの木のおまんの家です。「おじいちゃんありがとう。」

家をきれいにして、大事に使っていききたいです。そして、ぼくも、おじいちゃんのように、物を作る仕事がしたいと思います。

選者あとがき

あさのあつこ「作家」

どの作品が選ばれてもおかしくない力作ぞろいでした。すばらしい作文ばかりで、作文を読ませていただけることに幸せを感じました。子どもたちが「生きる」ということに対して非常に前向きであることを強く感じました。

尼子騷兵衛「漫画家」

昨年にも増して素晴らしい作品が揃いました。子どもたちも作文を書くことによつて、家族というものの良さに気づいたのではないのでしょうか。このような素晴らしい作文を書いてくれる子どもたちがたくさんいることをもっと多くの人たちに知ってもらいたいです。

森田正光「気象予報士」

真実や出来事を素直に伝える低学年の作品が印象的で感動しました。

審査をするために、仕事場に作文を持っていつて読んでいたら、周りのスタッフも一緒になつて夢中で読んでいました。もつともつと大人にも読んでもらいたいです。来年も素晴らしい作品を期待しています。

鈴木弘行「シナネン株式会社代表取締役社長」

昨年よりもさらに素晴らしい作品がたくさんきたことに感謝しています。若い社員とベテランの社員たちと二緒になつて作品を審査しました。多くの団体がこのコンクールの趣旨に賛同し参加してくれたことをとてもうれしく思います。

来年も素敵な作品をお待ちしています。

麻島陽一「朝日小学生新聞」

今年もバラエティにとんだ作品が揃いました。どれを選ぶか本当に悩みました。感動する作品ばかりですが、作文に書かれているお父さんやお母さん、家族の方がこの作品群を読まれたらどんな気持ちになるのでしょうか。きつと言葉にはできないくらいうれしい気持ちでしようね。

(順不同、敬称略)